

ディベート指導のための多値的思考方

平 柳 行 雄

Multi-valued Orientation for Teaching Debate

Yukio Hirayanagi

妙 録

ディベートは、論拠とデータの妥当性の検証による反駁・内因性の妥当性の検証・肯定側立論と否定側立論における演繹推論・想定のもろ化という批判的思考力を要求する。この批判的思考力は、ものごとを3つ以上の視点から分析する多値的思考方によって養成される。さらに、この考え方は、推論の言明における妥当性の検証・報告的側面と指令的側面の違いの認識・個々人が2つ以上の見えない文化に属し、状況によって優先する見えない文化が異なるという認識からもたらされる。

キーワード：ディベート、論拠とデータの妥当性の検証、批判的思考力、多値的思考方、
想定のもろ化

(2001年9月10日 受理)

Abstract

Debate requires students to refute, based on verification of warrant and data and to make resolutions of the affirmative and negative teams, based on verification of inherence for them. For the debate training, critical thinking skills such as deductive reasoning, inductive reasoning and assumption-identification are needed. In order to develop the critical thinking skills, one needs to acquire the multi-valued orientation that things should be analyzed from more than two perspectives. This multi-valued orientation would be made possible by realizing a fact that a message might be interpreted by its receiver differently from its sender and another fact that one belongs to more than one covert culture.

Key words: debate, verification of credibility for warrant and data, critical thinking skill, multi-valued orientation, assumption identification

(Received September 10, 2001)

1. はじめに

筆者には、高校3年生と高校1年生の2人の娘がいる。年に一度、親戚がこの2人と会うと、2人の名前をよく間違ふ。彼等は「姉がA子、妹がB子」と覚えている。ところが、常識に反して、筆者の下の娘は上の娘より体が大きいのである。常識では「姉が妹より体が大きい」と「想定」されている。浜本(2001)によれば、「想定」とは、情報の確認度を認知処理の過程で付与した情報内容のことである。筆者の親戚がよく娘の名前を間違ふのは、上記の想定が100%正しいわけではない、すなわち、「常識」(推定の言明)が常に正しいとは限らないという認識がなかったからである。上記の間違ひは、筆者の親戚が、ディベートに必要とされる批判的思考力(critical thinking skill)を身につけていないことを物語っている。Norris and Ennis(1989)の批判的思考力を基に、Davidson and Dunham(1997)は、次の4つのskillを、批判的思考力として取り上げている。Inductive reasoning(帰納推論)、source credibility(データの妥当性)、deductive reasoning(演繹推論)、そしてassumption-identification(想定 の 明確化)である。

現在、ディベートを企画立案能力や効率的な意思決定法という戦略として用いている企業や自治体もあり、授業や課外活動として用いている中学校・高等学校・大学もある。ディベートは必要であると考えている日本人は多いと想定されるが、茂木(2001)によれば、ディベートを「寡黙を美德とする日本人には向かない」とか「自分の意見でないわべだけの議論で、相手を理屈で言い負かすだけだ」と捉えている日本人もいる。個々人が複数の見えない文化を有するという点で、異文化コミュニケーションを余儀なくされている日本人にとってディベートは必要である。本論は、ディベート術向上のための批判的思考力と、その批判的思考力を養成するために、多值的考え方が求められていることを検証する。

2. ディベートと論拠の検証

松本(1992)は、次のようにディベートを定義している(P. ii)。即ち、①ある1つの論題をめぐり、②肯定と否定といった相反する2組の間で行われる、③一定のルールに従って行われ、④立証される議論を交互に闘わせ、⑤論理を武器として、⑥なんらかの形で審査判定された、⑦真理の探究・意思決定・問題解決・問題発見などを目的とした、⑧建設的なツウ・ウエー・コミュニケーションである。茂木(2001)は、ディベートの目的は、相手を理屈で言い負かすことではなく、データをもとに建設的・合理的に意思決定、問題解決、真理探究をすることにあるとしている。言い替えれば、多角的視点から問題分析や検証を行い、さらに実現可能な問題解決を模索するのがディベートである。

Speber and Wilson(1986, 1995)によれば、言語コミュニケーションは、会話参加者にとって相互に関連しているという「関連性の原則」では、日常の実践推論が演繹的推論でなされている。「関連性の原則」とは、意図的にさなれた会話である以上、聞き手に関わりがあるに違ひないという前提のことである。Condon(1972)によれば、言明は次の4つに分類できる。①記述の言明(観察能力のある1人以上の人により観察の対象にたい

してなされる言明) ②推論の言明(既知のことを根拠に、未来のことを推論する言明)
 ③断定の言明(自分の価値観を表明している言明) ④トートロジー(定義文)。例えば、
 上記の例をもう一度とりあげると、「A子がB子よりも体が大きい」という想定は、姉が
 A子、妹がB子というデータ(小前提)と、姉の方が妹より体が大きいという論拠(大前
 提)から、A子の方がB子より大きいという主張(結論)を導く推論の言明である。この
 推論を演繹推論という。しかしながら、現実には、必ずしも推論の通りではない。その意味
 するところは、論拠が100%正しいとは限らないので、その検証が必要ということである。
 これを、浜本は総称文を全称文と取り違えると表現している。「日本人は勤勉である」は
 前者に属し、「すべての日本人は勤勉である」は後者に属す。総称文とは、個人的経験に
 基づいて、ある文化に属している人を「—の人は—だ」と判断をしてしまう文をさす。
 経験により、ある種のものに共通の性質を見つけると、総称的判断をすることがある。こ
 れを帰納推論という。「姉は妹より体が大きい」という想定は、帰納推論による総称文で
 あり、全称文ではない。推論の言明の内容が必ずしも正しくないことを指摘できないのは、
 推論の言明という総称文における論拠の検証の必要性を自覚していないからである。この
 検証は、ダイバート術向上に必要である。

3. 異文化コミュニケーションと複数の見えない文化

Hayakawa (1978)によれば、二値的考え方とは、ある世界を2つの相反する極、例え
 ば「善」か「悪」かのどちらかに分けることである。一方、多値的考え方とは、ものごと
 を3つ以上の視点からみることであるとしている。Condon (1972)によれば、二値的考
 え方を電気のスイッチに、多値的考え方を水道の蛇口に例えている。例えば、自由民主党
 を支持しない立場の人がその政策の内容を検証し、その政党のある政策を支持するならば、
 それは多値的考え方である。内容の検証もせずに、自由民主党の政策という理由で、その
 政策を支持しないとするのは二値的考え方である。多値的考え方は、推論の言明における
 論拠の妥当性検証の為に必要である。この考え方は、異文化コミュニケーションによりひ
 き起こされる問題に対する解決能力を開発する。

日本の「文化」と西洋の「文化」という別け方をよくする。同じ英語を母語にし、西洋
 に属しているアメリカ人とイギリス人でも、自分の家庭での客のもてなし方が違う。前者
 は、“Make yourself at home.”というホストやホステスが何か食べ物や飲み物をだして
 くれる迄待つ必要はないもてなし方に対して、後者は、“Be my guest.”が原則であり、
 何かが出されるまで待つのが礼儀という文化をもつ。八代(2000)によれば、この文化は、
 我々の頭の中に蓄積されている観念という意味で、「見えない文化」(観念的文化)であ
 る。西洋の1員であるイギリス人のこの見えない文化は、東洋の1員である日本人も共有
 しているものである。西洋といっても、様々な見えない文化から成り立っていて、西洋と
 という範疇に属している国すべてが、ある見えない文化を共有しているわけではない。

Hall (1979)は、「ポリクロニック」(Pタイム)と「モノクロニック」(Mタイム)と
 いう2つの見えない文化を指摘している。前者は、計画やスケジュールよりもその時々を

重視する時間の使い方をよしとするものであり、後者は、スケジュールを重視し、物事を順番にかたづけしていくやり方である。Hallによれば、前者は、中南米・中東・アラブ地域・アジアで使用され、後者は、北欧・アメリカ合衆国・ドイツ、つまり西洋で使用されているのが通説である。日本はアジアに属し、Pタイム領域と考えられているが、現在では、Mタイムの影響はかなりあるものと考えられる。時間の使い方に関する限り、日本は西洋的要素の方が強い。アジアの国が、すべての見えない文化を共有していないのである。「西洋は——」とか、「アジアは——」という総称文が全文と解釈されておこる誤解は、それを構成している国が複数の見えない文化から成り立っていることを理解していないからであり、多値的考え方の必要性を理解していないことを示唆している。

地域だけでなく各個人も、様々な見えない文化から成り立っている。バーランド (1975) は、異文化コミュニケーションを、文化背景が異なる人と人の中で起きる意味を付与するための相互的コミュニケーション活動としている。異文化コミュニケーションにおいて、1人の人間が複数の見えない文化に属しているという認識は重要である。例えば、日本プロ野球のある球団のN監督とその息子であるN選手に関して言えば、前者は少なくとも、日本人・監督・父親という3つの異なる見えない文化に属し、後者は日本人・選手・息子という3つの異なる見えない文化に属している。同じ日本人同志の2人のコミュニケーションでも異文化コミュニケーションと呼べる。何故なら、状況によって、2人は違う基準の価値観(例えば、N監督は監督という地位、N選手は息子という親子関係)を行動・態度を決定する価値観として優先する可能性があるからである。故に、同じ日本人でも、自分の隣にいる人が異文化コミュニケーションの対象になりえるのである。外国人とのコミュニケーションのみが異文化コミュニケーションであり、日本人同志のそれは異文化コミュニケーションとは呼ばないという考えは、二値的である。

4. デイベート指導に必要とされる想定 of 明確化と指令的側面の必要性

4.1. 推論の言明に対する論拠の妥当性の検証と想定 of 明確化

デイベート術向上には、批判的思考力の養成が必要であり、そのためには、多値的考え方を要する。多値的考え方とは、推論の言明に対する論拠の妥当性の検証と報告的側面・指令的側面の違いに対する認識を意味する。次の例は、Whiting (1990) の You Gotta Have wa の中で紹介されているストーリーを筆者が、二値的考え方と多値的考え方という視点で分析したものである。あるプロ野球チームの、日本人監督Oとアメリカ人選手Eは、コーチや他の選手のいる前で罵倒しあった。理由は、Eの友人であるアメリカ人選手(同じチーム)が、試合でエラーをしたので、高額 of 罰金を課されたが、同じエラーをした日本人選手には、その罰金が課されなかった。つまり、日本人とアメリカ人に対するOの扱いが不公平であるとEは解釈したのである。この問題を解決するように命令されたのが、このチームに雇われている通訳であった。Oは、選手というものはどんな場合でも監督に従うものという考えを持っていた。この通訳は、何故、Oが怒っているのかを、Eにやさしい口調で説明をしたので、Eはあやまってもいいと言った。但し、謝る内容は、「人前で」

監督を罵倒したことである。罵倒したこと自体は悪くないとEは考えていた。何故なら、アメリカ人選手を不当に扱ったのはOで、不当に扱うことは非難されるべきことであるのだから。ただ、公の場で罵倒しては、Oの面子もつぶれる。だから、人のいない所で批判すべきだったと考えたのである。この通訳は、この申し出を問題解決にうまく利用した。OにはEが謝りたいと申し出ているとだけ伝えた。何に対してという明確な説明をしなかったし、Oも聞かなかった。こうして、一応の解決になった。OとEが、お互いに「自分は正しい、相手が間違っている」と主張する二値的考え方をとれば、一応の解決もなかったであろう。Oは二値的考え方のままであった。ここで注目すべきは、Eが、Oを批判したこと自体と「公の場」で批判したことを区別し、後者に対して自分が責任があると認めたことである。これは多値的考え方の例である。演繹推論を使って説明すると次のようになる。監督の考えが正しくともそうでなくとも従うべきであるという論拠（大前提）に基づき、監督を罵倒した（データ）選手は、制裁をうけるべき（主張）であるというのが、Oの考えである。一方、Eは、上記した論拠はいつも正しいとは限らない、つまり、監督の正しくない命令には従わなくてもよいと論拠の妥当性を検証したのである。この2人の考え方の違いは、推論の言明（常に、監督の命令には従うべきである）に対する論拠の妥当性を検証し、何に対して謝罪をし何に対して謝罪する必要がないのかという「想定のも明確化」をしたことである。自分が悪くなくても謝罪すれば人間関係が保たれるという1つの見えない文化に固執する人（二値的考え方）にとって、何に対して謝罪し、何に対しては謝罪しないという想定のも明確化は意味はない。想定のも明確化とは、Norris and Ennis（1989）によれば、5つの批判的思考力の1つである advanced clarification を構成する2つの項目（Defining terms and judging definitions と assumption identification）のうちの後者である。論拠を明確にすることによって、論拠のない主張とそうでない主張を分けることである。前出のストーリーに出てくるEは、通訳の説明を聞いたあとは、多値的考え方によって想定のも明確化をしたことになる。多値的考え方とは、与えられた論拠、または推論の言明に対して疑問を呈すること、即ちその妥当性を検証するを意味する。

4.2. 報告的側面と指令的側面

英語を母語にする人と日本語を母語にする人は、異なる見えない文化も有している。人命の尊さ・民主主義の尊重・事実と人間関係を重んじるという見えない文化は同じでも、何を優先させるかという見えない文化が異っている。謙遜さよりも事実を伝えることが優先される見えない文化と客観性と事実の伝達よりも謙遜さを尊重することによって保たれる人間関係を重んじるそれとは異なる。日本では、自分の身内を紹介する時は、その人に、たとえ賞賛されるべき長所があってもその逆を言う。謙遜からもたらされる人間関係が、事実を伝えるという客観性の尊重よりも重要と考えられているからである。Sakamoto and Naotsuka（1998）の次の例示はその違いをよく表わしている。ある日本人男性が、アメリカ人を自分の家で夕食に招待する時、「家内は美人でないけれど、どうぞお越し下さい」と言った。その招待されたアメリカ人が、その奥さんに会った時、奥さんが非常に美人で

あったので驚くと同時に、招待してくれた日本人が、何故「うそ」をついたのかわからなかった。謙遜さを最優先にした発信者のメッセージは、「うそつき」という「指令的側面」で、このアメリカ人には解釈された。この日本人男性は、アメリカ人女性にうそつきだと解釈されるとは思わなかった。Condon (1972) によれば、どんなメッセージでも、報告的側面と指令的側面に分かれる。前者は、表面的見かけの意味であり、後者は、前者の内容についての解釈やそれに基づく聞き手や読者の反応をさす。日本人同志で通用する1つの見えない文化(謙遜さを重視することで人間関係を円滑にすることを最優先する)は、アメリカ人にも通用すると想定したことが問題であった。事実を伝えることが最優先されるべきという見えない文化に基づいて行動しているアメリカ人にとっては、「うそをついている」と解釈されたのである。上記のメッセージの報告的側面は同じでも、指令的側面が異なるのは、見えない文化が異なっているからである。複数の見えない文化から成り立っている2つの集合体である日本人とアメリカ人には、共有する見えない文化とそうでない見えない文化があるという多値的考え方の欠如が、この誤解の原因であった。つまり、報告的側面が正しければ指令的側面もいつも正しいという二値的考え方が誤解の原因である。では、こうした指令的側面の違いによる誤解に対する解決策としての多値的考え方とは、具体的にどのようなものか。筆者は、これを教材に使って解決法を学生にクラスで問うた。この日本人男性が招待の言い方を変えるべきであったのか、つまり、メッセージの受信者がアメリカ人であることから指令的側面の違いを考慮して意思の疎通をはかるべきであったのか、アメリカ人が日本の見えない文化をもっと理解してから来日すべきであったのかという問いである。何人かの学生は、「僕は日本人だから、誰が話し相手でも、招待の言い方を変える必要はない」と答えた。これは、Gudykunst and Kim (1997) によれば、帰属集団の価値基準を無批判に最優先させる二値的考え方である。日本人は、謙遜を重視し人間関係を円滑にすることに価値をおき、アメリカ人は、客観性に価値を見出すという想定は二値的であり、日本人が客観性を全く重視せずに、アメリカ人は人間関係を全く無視することを推論させる。これは、真実ではない。日本人とアメリカ人の違いは、何を最優先させるかである。これが多値的考え方であり、この考え方は、個々人は複数の見えない文化を有するという想定に基づいている。驚いたことに、何人かの学生は次のようなすばらしい多値的考え方に基づいた答を提供した。「意思の疎通をはかる価値基準は、日本人かアメリカ人という国籍ではなく、親しさの度合であるべきである。つまり、親しい日本人であれば、謙遜を優先させることはなく、事実を語ればよい」であった。これは、指令的側面を重視することによって、受信者に誤解がないよう配慮することが優先されるべきであるという多値的考え方であり、その想定のもくろみの基準は親しさの度合にするべきという考えである。この報告的側面と指令的側面の違いの認識は、多値的考え方をうながし、論拠の妥当性に対する検証へと導くという点で、ディベート指導に役立つ。

5. ディベートの前段階訓練としての日常実践推論

ディベートの前段階の訓練として、日常の実践推論を使って推論の言明と断定の言明に

対する妥当性の検証が可能である。次の3つの例を考えてみたい。

(1) 日本人は英語圏の国に留学すれば、英語は自然と上達する。

この推論の言明は必ずしも正しくない。何故なら、「英語圏に留学している日本人は、英語で意思疎通する機会を多くもつ」という論拠が正しくないからである。英語圏に留学している日本人と接する機会をもてば、いつも日本人同志で集まっている風景をよく目にする。(データ) 論拠の妥当性の検証によって、英語で意思疎通する機会を多くもつ日本人留学生とそうでない留学生という想定のもろ化が必要であり、上記の推論の言明は正しくない。

(2) 君が代斉唱に反対する日本人は、日本人としての誇りを失っている。

この推論の言明も必ずしも正しくない。何故なら、「君が代に反対している人は、日本の誇りである国歌の必要性を認めていない」という論拠(大前提)が正しくないからである。君が代に反対している人の中には、国歌は必要であるがそれが君が代である必要はない人と国歌そのものに反対している人が存在するという想定のもろ化が必要である。

(3) 日本人の英語力は、世界で非常に低く評価されているので、英語を日本の第2公用語にすべきである。

この断定の言明も必ずしも正しくない。「英語を第2公用語にしなくても、英語学習方法を変えれば日本人の英語力は伸ばせる」という内因性の否定を論証できれば、上記の言明が正しくないことが証明される。内因性とは、問題が現状では解決できない、あるいはメリットが現状では得られないことをさす。

以上の用例は、想定のもろ化・内因性の妥当性の検証というディベートで養成されるべき批判的思考力が、日常生活の中で見い出される推論の言明と断定の言明の妥当性の検証で訓練されうることを提示している。

6. ディベートにおける肯定立論・否定立論・反駁

茂木(2001)によると、ディベートは、①思考訓練、②実社会のシミュレーション(実社会と関連している問題)、③聴き方の訓練、④表現の技術という4つの視点から論じている。本論では、想定のもろ化・演繹推論・反駁という視点で、①に焦点をあてたい。ディベートでは、ある論題に関して、論証(論拠とデータとを使い主張する——演繹推論)し、相手の議論を検証しなければならない。ある論題(トピック)に対して、自分の意見に関係なく、肯定側(論題を肯定する側、即ち現状変革側)・否定側(論題を否定する側、即ち、現状維持側)のどちら側からも議論できるようにするのである。英語でいう devil's advocate(悪魔の弁護人) — あえて反対側から論題を検証する — を演じるのである。

茂木(2001)によれば、略式ディベートのフォーマットとして、①肯定側立論、②否定側から肯定側への反対尋問、③否定側立論、④肯定側から否定側への反対尋問、⑤肯定側第1反駁、⑥否定側第1反駁、⑦肯定側第2反駁、⑧否定側第2反駁という形式を提示している。茂木(2001)は、次のように、肯定立論と否定立論を定義している。前者は、(1) 問題の深刻さ、(2) 原因と問題の因果関係(内因性)、(3) プランの実行可能性、(4)

プランの問題解決性、(5)プランによるメリット・デメリットという基本争点をさし、後者は、(1)現状での問題解決性、(2)新しい問題発生の可能性の指摘をさしている。本論では、①、③、⑤、⑥というフォーマットに焦点をあてたい。肯定立論は内因性の妥当性の指摘、否定立論は内因性の妥当性の否定を必要とする。例えば、論題が「首相公選制を導入すべし」の時、何故、その政策がその哲学・基本理念(首相公選制を導入しなければ、民意が反映されず国民は政治に関心を失う)のために必要かを肯定立論では論証しなければならない。否定立論には、その哲学のためには、その政策が必要でないことを証明すればよい。言い替えれば、内因性の妥当性の検証が重要である。さらに、肯定立論でも否定立論でも、データと論拠から主張を導く演繹推論が要求される。反駁には、演繹推論における論拠とデータの妥当性の検証を伴う。反駁とは、自分の議論の妥当性を検証するために相手の議論が正しくないことを論証することである。そのための1つの戦術が、論拠とデータの妥当性を否定することである。即ち、肯定立論・否定立論・反駁には、内因性と論拠とデータの妥当性の検証を要する。ディベートの授業では、①ある論題に対して肯定立論や否定立論が何であるかの把握、②演繹推論と内因性の妥当性の検証に基づいた肯定立論と否定立論、③悪魔の弁護人と論拠の妥当性検証に基づいた反駁とを指導する必要がある。次に、実社会のシミュレーションという視点から、次の実社会に関連している論題に関してディベート例と筆者の解説を提示する。解説とは、以下に掲載するディベート展開に欠落している論点の指摘である。

(1) 首相公選制を導入すべし

肯定立論

1. 首相公選制を導入しなければ、支持率の低い人でもいつまでも首相でい続けてしまう。(論拠) 例えば、前 M 首相。(データ) 結果として、首相公選制を採用していない現状では、国民は政治に関心を払わず、民意が政治に反映されない。(主張)

否定立論

1. 人気で決まってしまうのはよくない。(主張) 人気は信憑性がない。(論拠) 例として、大阪府の前 Y 知事があげられる。(データ)
2. 国民に政治に対する関心があまりないのは、選挙制度にあるのではなく、和を重んじ、自分の意見発表が自由にできない日本人の精神風土にある。(内因性の否定)
3. 公選制を導入しなくても、今の小選挙区衆議院選挙では、地域の利益を代表する人が選ばれる(論拠)ので、民意は政治に反映される。(主張) (内因性の否定)

肯定反駁

1. 人気はその人の信用を反映している(論拠)ので、人気も重要である。(主張) 例として、日本の K 首相があげられる。(データ) [解説=人気には信憑性がないという論拠に反駁している(信憑性のある人気とそうでない人気がある=想定明確化)]

否定反駁

1. 人気のある人の発表する政策に対する反論を許さない空気・風潮ができあがる。(論拠) 例えば、T 外務大臣の政治姿勢を公に批判をした複数の大学教授が脅迫された。(データ) 民主主義(自分の意見は自由に発言できる)が妨げられている。(主張) [解説＝データを明確にする必要がある＝データの明確化]

(2) 高校生の制服着用は廃止すべきである

肯定立論

1. 制服着用によって個々の高校生の個性を損なわせている。だから、制服着用は廃止されるべきである。(主張) [解説＝制服着用によって高校生の個性が損なわれるという論拠が述べられていない、即ち内因性の指摘ができていない]

否定立論

1. 制服着用が、何故、没個性の原因となるのか。制服着用が没個性の原因になっている例を示してもらいたい。個性が伸びない原因は、他(例えば、学校カリキュラムでの個性に応じて選べる選択科目が少ない)にあるのではないか。(内因性の否定)
2. 制服着用によって非行(喫煙等)抑止力になっている。[解説＝データを準備する必要がある＝データの明確化]
3. 制服着用によって母校に誇りがもてる。[解説＝何故、制服着用でないと母校に誇りがもてないのかという反対尋問を予測して、その答えを準備する必要がある＝論拠の妥当性の検証]
4. 制服着用によって、学校で着用する私服を購入する必要がない(論拠)ので、経済的に問題のある学生にとって経済的負担が軽い。(主張) [解説＝制服購入の方が、私服購入よりも経済的に安いというデータを準備する必要がある＝データの明確化]

肯定反駁

1. 制服を着用していても、喫煙をしている高校生がいて(データ)、非行抑止力になっていない。(主張) [解説＝過剰一般化にならないようにする。データが少なければ、過剰一般化となる]
2. 制服を着用しなければ母校に誇りがもてないのか。制服を着用しなくても、母校に誇りはもてる。
3. 制服を着なくても、経済的負担にならない。安い私服を購入し、毎日着用すればよい。(論拠) 私服で通うことが、必ずしも経済的負担にはならない。(主張)
[解説＝私服購入の方が制服購入よりも経済的にはよいというデータが必要である＝データの明確化]

否定反駁

1. 制服を着て、非行(喫煙等)に走っている高校生が何人いるのか。1人や2人の例から結論を急ぎすぎるべきではない。

(3) 日本の首相は、靖国神社に参拝すべきではない

肯定立論

1. 中国政府と韓国政府が、首相の靖国神社参拝に強く反対している。(データ) 靖国神社に14人のA級戦犯が合祀されている(データ)ことから、首相の参拝は、日本の戦争美化に繋がる(論拠)から首相は靖国神社に参拝すべきでない。(主張)
2. 靖国神社のような宗教法人による宗教儀式に首相が参加するのは、憲法違反(20条 一国及び機関は宗教活動をしてはいけない)にあたる。(論拠) 1997年、最高裁が靖国神社への玉串料公費支出を違憲としている。(データ) =内因性の指摘
3. 靖国神社に合祀される条件は、「天皇に命をささげた」である。(論拠) 首相が靖国神社参拝することは、天皇に命をささげることを国民に奨励すること、すなわち、戦争を美化することになる。(主張) =内因性の指摘

否定立論

1. 中国や韓国政府が、日本の内政に関して強く主張すればいつでも日本政府は方針を変更する(論拠)のであれば、内政干渉である。(主張)
2. 戦争の犠牲者のお陰で今の日本の繁栄があることを思えば、感謝という素朴な気持ちを表明して何も問題がない。(論拠) 多数の日本人がこの気持ちを共有している。(データ) [解説=多数とはどのくらいか。統計で根拠を示す必要がある。人によって、多数の定義が異なる=報告的側面と指令的側面の違いの認識]

肯定反駁

1. 中国と韓国政府は、第二次世界大戦で行った日本軍の残虐行為に対する責任の認識の不十分さを指摘し、他の日本政府が行っている政策に関して批判をしているわけではない(論拠)ので、内政干渉にはあたらない。(主張)
2. 素朴な気持ちを表明すること自体に問題はないが、その表明する場所が問題である。(論拠)。国立の千鳥が瀏戦没者墓苑を利用すればよい。(主張)

否定反駁

1. 公人ではなく私人として参拝すれば、憲法上問題ない。
2. 歴代の首相が新年に行っている伊勢神宮参拝に対して、何も憲法上、問題提起されていないのに、この靖国神社だけ何故問題になるのか。

7. 最後に

ディベートとは、肯定立論と否定立論における演繹推論(データと論拠にとって主張を導く)と内因性(問題が現状では解決できない、またはメリットが現状では得られない)の検証(肯定側は妥当性の指摘、否定側は妥当性の否定)そして、肯定・否定側の反駁(論拠とデータの妥当性の検証に基づく)を通して、物事をより客観的に視る目を養うことである。2つ以上の見えない文化に属している人間の相互作用による異文化コミュニケーションという想定は、物事を3つ以上の視点から分析する多値的考え方の導入を容易にする。この多値的考え方は、与えられた論拠に対する疑問を出発点とし、悪魔の弁護人の働

きをうながし、ディベート術向上に必要な批判的思考力（演繹推論・想定明確化・データと論拠の妥当性の検証）を向上させる。さらに、日常推論の妥当性の検証はディベートへの導入となる。

参考文献

- Barnlund, D. C. (1975). *Public and Private Self in Japan and The United States*. Tokyo: The Simul Press.
- Condon, J. C. & M. Saito. (1974). *Intercultural Encounters With Japan*. Tokyo: The Simul Press.
- Condon, J. C. (1978). International Communication from a Speech Communication Perspective. In F. L. Casmir (Ed.) *Intercultural and International Communication*. Washington D. C.: University Press of America.
- Condon, J. C. & Yousef, F. S. (1989). *An Introduction to Intercultural Communication*. Tokyo: Kinseido.
- Daividsen, B. W. & Dunham, R. A. (1997). Assessing EFL Student Progress in Critical Thinking With the Ennis-Weir Critical Thinking Essay Test. *JALT Journal*, 19 (1)
- Gudykunst, W. B. & Kim, Y. Y. (1997). *Communication with Strangers: An Approach to Intercultural Communication*. New York: McGraw-Hill.
- Hall, E (1976). *Beyond Culture*. New York: Anchor Press/Doubleday. 36-37.
- Hayakawa, I. (1978). *Language in Thought and Action*, 4th. ed. New York: Harcourt Brace Jovanovich, Inc. 211-228.
- Sakamoto, N. & Naotsuka, R. (1998). *Polite Fictions* Tokyo: Kinseido.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986). *Relevance*. Oxford: Blackwell.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1995). *Relevance*. 2nd ed., Oxford: Blackwell
- Whiting, R. (1990). *You Gotta Have Wa*. New York: Vintage Departures.
- "Debate winners favor popular vote." *The Daily Yomiuri* 12 Jul. 2001.
- "Male chauvinism still dominates sumo world." *Mainichi Daily News* 23 Feb. 2000.
- "Support growing for Osaka gov.'s step into ring." *Mainichi Daily News* 20 Feb. 2000.
- 浜本秀樹 【多文化世界の意味論】 東京 松柏社 2001。
- コンドン, J. C. 【ことばの世界】 斎藤美津子・横山紘子訳 東京 サイマル出版社 1972。
- 松本道弘 【ディベートの原理・原則】 東京 綜合法令株式会社 1992。
- 茂木英明 【ザ・ディベート】 東京 ちくま新書 2001。
- 八代京子、町恵理子、小池浩子、磯貝友子 【異文化トレーニング】 東京 三修社 2000。
- "首相公選制を導入すべきである。" <<http://www.wako.ac.jp/~hanya/seminar/d99d07.htm>>
- "小泉総理が公式参拝をめざす靖国神社問題の今" <<http://www3.ocn.ne.jp/~kenpou/sub3/yasukunijinjya.htm>>